

# アダム・スミス問題は死なず ——ヤング説の検討——

折 原 裕

はじめに

第1節 道徳科学としての経済学

第2節 公平な観察者と市場

第3節 交換の正義と分配の正義

おわりに

はじめに

経済学の父と称されるアダム・スミスが、母校グラスゴー大学の教授として担当していた科目は、経済学ではなく、道徳哲学であった。これは、スミスが、自らの師のフランシス・ハスソンの担当科目を引き継いだことによる。そして、スミスの学名を最初に高めたのも、経済学の著作である『国富論』ではなく、道徳哲学の著作である『道徳感情論』であった。

しかし、それらは、スミスが年齢とともに、道徳哲学から経済学へと関心を移し変えていったことを、直ちに意味するものではない。スミスは、グラスゴー大学で道徳哲学を教えていた頃から、その講義の中に、法学と経済学に相当する部分を含めていたことがわかっているからである。

つまり、スミスにとって、経済学は当初、道徳哲学の一部として論じられうるものだと、理解されていたことになる。

わが国の経済思想史を振り返ってみても、江戸時代に活躍した経済思想家たちのほとんどは、経済の問題を道徳の問題として論じているのである。<sup>1)</sup>

それゆえ、経済の問題と道德の問題とは、かつては、洋の東西を問わず、密接な関連にあるものと受け止められていたのであろう。経済も道德も、いずれも人間の欲望に深く関わるものであることを思えば、これは不思議ではない。したがってまた、スミスが、経済学を道德哲学の一部として論じうると理解していたとしても、それ自体決して不思議ではないのである。

とは言え、ここに問題がないわけではない。スミスが年齢とともに、道德哲学から経済学に関心を移し変えたわけではないにせよ、またスミスが『国富論』を公刊した後も、『道德感情論』の改訂に尽力したという事実があるにせよ、『国富論』公刊以後のスミスにとって、経済学はもはや道德哲学の一部としては論じられえないし、『国富論』は『道德感情論』の続編でもない、という関係になるからである。

これが、いわゆるアダム・スミス問題につながるものであることは言うまでもない。アダム・スミス問題は、最初は、『道德感情論』と『国富論』と、両者を二者択一的にとらえて、いずれが真のアダム・スミス像を反映するのか、という問題として提出された。近年では、『道德感情論』と『国富論』との間に二者択一的な矛盾はないとされ、問題は基本的には解決済みであるとされることが多い。

だが、ことはそう簡単ではない。『道德感情論』と『国富論』との間に深刻な矛盾がないとしても、両者が非常に色合いの異なった著作であることは、読み比べてみるなら、誰の目にも明らかである。そうであるからには、『道德感情論』寄りにスミスを理解しようとする論者と、『国富論』寄りにスミスを理解しようとする論者と、双方の間に微妙な対立が生ずるのは、止むをえないところであろう。

こうして、アダム・スミス問題についての論争は、新しい形で繰り返されざるをえない。その一方の極には、『道德感情論』寄りにスミスを理解し、『国富論』の中に『道德感情論』の論理の延長を見ようとする論者が、当然いるわけである。以前に取り上げたフィッツギボンスの著作『アダ

ム・スミスの自由、富、徳性の体系——「国富論」の道徳的、政治的基礎——<sup>2)</sup>が、その典型のひとつである。

今回ここで取り上げる、J. T. ヤングの近著『道徳科学としての経済学——アダム・スミスのポリティカル・エコノミー——』<sup>3)</sup>も、その点では、フィッツギボンズと同様の立場に立つ。しかし、スミスのストア派的性格を強調するフィッツギボンズと、市場における観察者の役割を強調するヤングとの間には、かなり大きなへだたりがあると言ってよい。

小論では、このヤングの著作を手がかりにして、アダム・スミス問題について、改めて考えてみたい。

## 第1節 道徳科学としての経済学

### 1

「道徳科学としての経済学」とは、ヤングの著作のタイトルであるが、ここで先ず問題となるのは、「道徳科学」と言われる場合の、「科学」という言葉の意味であろう。もちろん、ここでの問題は、アダム・スミスにとって科学とは何であったか、という点に絞られる。

ヤングによれば、「スミスにとって科学とは、今日よりも大まかで、今日よりも焦点が不明瞭な活動であった。」<sup>4)</sup>人間は、予期せぬ何かの出現から生ずる驚きによって、新たな何かの出現から生ずる不思議によって、首尾一貫した日常の感覚を乱され、心像の安心を失なう。これを解決するのが、科学なのだ。「そういうものとして、科学の理論は、心像をなだめる必要に動機付けられるところの、精神的な構築物なのである。新たな、そして予期せぬ何かの出現は、驚きや不思議の感覚とともに、精神を混乱させる。この混乱を静めることが、科学のゴールである。」<sup>5)</sup>こう、ヤングは言うのである。

すなわち、ヤングの言に従うなら、スミスにとって、科学に実証性は要求されない。だから、たとえば、ニュートン物理学の妥当性も、それが天体の運動等によって実証されるゆえではなくて、それが天体の運動等を見て、驚きや不思議を感じずる人間の心像に、安心を与えるゆえであることになるのだ。実際、ヤングはこう述べている。「スミスは、ニュートン的な体系の成功を、広い範囲の現象を、単純で親しみやすい原理、すなわち重力によって、説明する能力に帰着させた。」<sup>6)</sup>

経済学がこのような意味で科学なのだとすれば、当然それは、実証主義の経済学とは、かけ離れた位置に立つことになる。それゆえ、ヤングによるなら、現代経済学の主流派とも目される新古典派経済学は、父であるアダム・スミスの経済学から、かけ離れたものであることにならざるをえない。

こうして、ヤングは、大略次のように現代経済学を批判する——。ほとんどの経済学者たちが思い描くストーリーは、『国富論』の出版によって、経済学は道徳的な過去から免れ、純粹に分析的で、実証主義的な仕事になったということである。「この解釈の中心的な教義は、アダム・スミスは、彼がより“成熟し”、経済学に対する彼の焦点を変えたがゆえに、彼の初期の『道徳感情論』についての考えを“忘れた”、ないしは“無視した”、ないしは“変えた”、というものである。」<sup>7)</sup>しかし、今日の経済学のおおもとである『国富論』を理解するのに『道徳感情論』は必要ないとか、『国富論』が経済学と倫理学との分離の起源だとか、いずれも誤った見方である。そうではなくて、実証主義的な観念が後に入り込むことによって、道徳科学が無意味とされ、『道徳感情論』が『国富論』の理解に不用とされることになったのだ。ヤングに言わせれば、『国富論』の出版によって経済学が倫理学から分離したとのストーリーは、経済学と倫理学とが分離してから後に、さかのぼってこしらえ上げられたものに過ぎないのだ。

そして、さらに踏み込んでヤングは、次のように主張する。「実証主義

者が抱く価値自由な科学という概念は、それ自体倫理的な価値なのである。<sup>8)</sup>」

このヤングの主張は、イデオロギーから自由な科学はありえない、という主張と同義であろう。確かに、意識を持ち、文化の枠組みの中で選択を行なう、人間の行動を問題にする限りにおいて、経済学が完全にモラル・フリーでありうるかどうかは、異論の余地があるところかも知れない。これは、ホモ・エコノミックスというような仮定から発する理論で、市場と人間が説明し切れるのか、という問題とも関連するだろう。

それはともかく、ヤングの立場からするなら、直接に道徳を取り扱わない『国富論』の世界も、道徳を欠いた世界ではないのである。

ヤングによるなら、『道徳感情論』と『国富論』とは、同次元に並び立つものではない。『道徳感情論』での論理は、『国富論』での論理の前提であり、より抽象度の高い論理なのである。ヤングは言う。「道徳性から法学さらに経済学への移行において、スミスは、一般的なものから特殊なものへと、抽象度の高いものから低いものへと、移行しているのだ。道徳哲学が法学に陰影を付け、法学が経済学に陰影を付けるのである。<sup>9)</sup>」

だから、ヤングにとって、『道徳感情論』だけが規範的なのではない。「自然法学もまた規範的な追求である。自然法学は、法というものが、何であるかと同様、何であるべきか、にも関わる。<sup>10)</sup>」そしてまた、経済学にも、規範的な断面が残ることになるわけである。「慎慮、正義、博愛、自己統制といったスミスの徳性のそれぞれに伴ない、道徳哲学と経済学との間には、重要な相互関係があることになる<sup>11)</sup>」のである。

## 2

ところで、人が道徳を知るのは、どのようにしてなのか。こう問うなら、もちろんそれは、ヤングにとっても、同感の原理による。人は、他者の行

為を観察し、また自らの行為を他者から観察され、そうした同感し、同感される、社会的な連鎖の中で経験を積むことによって、行為の善悪の判定基準である、公平な観察者を心の中に育てるわけである。

ヤングは、『道徳感情論』の冒頭にある、次の文章を引用している。「人間がどんなに利己的だと想定されうるにせよ、彼の本性の中には、他者の運命に関心を寄せ、また、それを見る喜び以外に何も引き出さないにもかかわらず、他者の幸福を必要ならしめる、いくつかの原理が明らかに存する。<sup>12)</sup>」

その上でヤングは、こう述べる。「私が受け止めるところでは、スミスが意味しているのは、人間本性は自己利害的であり、『同時に』他者配慮的であるということだ。この他者配慮的原理が〔……〕同感なのであり、それは、他者の感覚や経験への想像された代理者の応答から生ずるのだ。それは、完全に欠落している者などありえない、人間本性の本源的な原理なのである。<sup>13)</sup>」

ここでヤングが言わんとしているのは、同感 は 利己心 に 由来するものでもないし、博愛心に由来するものでもない、という点である。つまり、同感の原理は、たとえば他者に気に入られたいというような、利己心に基礎を置くものでもないし、また、自己を犠牲にしてまで他者のためになろうというような、博愛心に基礎を置くものでもない。ヤングの言では、「自己愛の別の形態ではない、同感の原理は、人間本性の中の独立した独自の原理である。<sup>14)</sup>」そして、「同感と博愛の同一視は明らかに、スミスが意味したところの著しい誤解である<sup>15)</sup>」ということになる。

すなわち、同感という他者配慮は、それが結果として自己愛にかなう場合があるとしても、あるいは結果として博愛的な行為と同様の場合があるとしても、それらとは異なるのだ。同感という他者配慮は、別の原理の助けによらない、人間に自然に備わっている本性なのである。

ヤングが次のように言うのも、そうした文脈においてのことである。

「人間は、自己配慮的であると同時に他者配慮的であると、みなさなければならない。このことだけで、“古い” アダム・スミス問題の解決を越えて、進むことになる。<sup>16)</sup>」つまり、「古い」アダム・スミス問題は、『道徳感情論』の博愛主義と、『国富論』の利己主義と、両者の対立という図式から発生するものだからである。

ヤングように考えるとすれば、同感の原理に基づく行為が、結果として効用をもたらすとしても、その効用は、行為の動機ではありえない。ヤングの述べるところでは、「スミス理論の重要な含意は、効用とは“後知恵”だということである<sup>17)</sup>」し、このことが、「スミスの理論と、ヒュームの理論のように、〔道徳的な〕是認を効用で基礎付ける〔……〕理論とを、区別する<sup>18)</sup>」点なのである。

こうして、ヤングは、人間の道徳性をめぐるスミスの方法を、次のようにまとめる。「スミスが信じたのは、我々がすべて同じように考え、同じ欲望を持ち、またしたがって、完全な道徳性を構成するのは何であるかに関して、ついには同じ帰結に到達しうる、ということだった。一般的な意味でのこの信念が、スミスの道徳性における自然法的要素なのである。〔……〕合理主義者の〔演繹的な〕自然法とは違い、スミスの自然法は、経験を通じて学ぶという、経験主義者の信念に基づいていた。道徳性には外的な、自然的な基準があるが、あらゆる外的な対象と同様、ただ感覚の経験のみを通じた、それらに対する情報が必要になる。我々は、事物自体に対する直接的、直感的な知識を持つことはできず、事物の知覚によるしかない。しかしながら、我々は、我々自身の自然に本能的に導かれて、そうした基準の实在を信ずるようになり、また、我々の内的な基準が、そうした基準の妥当な近似値であることを信ずるようになる。こうしたことが生ずるのは、我々が我々自身の内的な知識を有するがゆえである。<sup>19)</sup>」

## 第2節 公平な観察者と市場

### 1

ヤングによれば、人間に道徳的行為を促す公平な観察者は、人間の自己利害関心と無縁ではありえない。だから、『国富論』のように、自己利害関心に発する経済活動を取り扱う論理次元でも、公平な観察者は役割をなくすわけではない。自己利害関心に発する経済活動も、公平な観察者の是認の枠内でなければ、道徳的な妥当性を逸することになるのである。ヤングの言では、「〔道徳が命ずる〕自己統制の限界の枠内であれば、また〔自然法が命ずる〕正義の限界の枠内であれば、富、地位、健康、名声といった、自己利害関心の諸対象の個人的な追求は、道徳的には是認される行為なのである。<sup>20)</sup>」

だから、そうした限界を踏み越えるならば、「観察者たちの是認を失なう危険を冒すことになる。<sup>21)</sup>」つまり、ヤングの見方からすれば、「正義は社会の存在を下支えするだけでなく、自己利害関心からの感情を抑制もする。〔観察者からの道徳的〕否認の恐れは、どんな仕方にせよ、他人を害したり、他人の権利を侵害したりしないという地点だけを、選び取ることへと人を導くのだ。<sup>22)</sup>」

それゆえ、自己利害関心に発する富の追求は、道徳と矛盾するものであってはならないし、通常は矛盾しないのだ、とヤングは考える。そして、『道徳感情論』から引用しつつ、こう述べるのである。「富の追求は、徳性のある暮らしに取って代わるものではない。スミスにとって、有徳の生活の内部に、富の妥当な場所があるのだった。〔……〕“生活上の中流および下流の地位では、徳性への道と、財産への道とは、幸運にも、ほとんどの場合、きわめて同一に近い”<sup>23)</sup>のである。<sup>24)</sup>」

ここで問題となりうるのは、ヤングのスミス理解の妥当性はとりあえず



措き、『国富論』に公平な観察者についての言及がない点であろう。このことは、ヤング説に対する反論の有力な根拠となりうる可能性がある。この点について、ヤング自身は、こう弁明している。「自己利害関心は、そこ〔『国富論』〕では、『道徳感情論』におけるのと同様、自己統制によって緩和され、正義の規則に服従するものと、理解されている。〔……〕『国富論』における公平な観察者の不在は、ここでの観点からするなら、分業の起源という問題の追求の拒否と、同じことである。“それは研究すべき我々の当面の課題に属さない”とスミスは言っているのだ。<sup>25)</sup>」

ヤングが引用しているスミスの言葉を、前後を含めて引用してみよう。

「こんなにも多くの利益が引き出されるこの分業は、もともと、それが引き起こす一般的富裕を予見したり意図したりする、何らかの人間の知恵の所産ではない。分業は、そうした広範囲の効用が目に入らない、人間の本性の中のある性向、すなわち、ある物を他の物と取引し、交易し、交換する性向の、非常にゆっくりで漸進的だが、必然的な帰結なのである。／  
 いったいこの性向は、人間本性の中の、もはやこれ以上は説明不能な、本源的な原理なのか、あるいは、もっとありそうなことだが、理性と言語という能力の必然的帰結であるのか。それは研究すべき我々の当面の課題に属さない。この性向は、すべての人間に共通なものであり、他のどんな動物にも見出されないものである。<sup>26)</sup>」

上で、スミスが「当面の課題に属さない」と述べているのは、ヤングが言うように、分業の起源、あるいは、交換性向の起源それ自体ではない。スミスが立ち入らないとしているのは、交換性向が、人間の本性なのか、それとも、人間が（たぶん本性として）持つ能力の結果（文化と呼んでいいだろう）なのか、という点なのである。

確かに、その交換性向は（そういうものがあるとして）、市場の前提であるという意味において、同感や観察者が道徳の前提であることと、平行的な関係に立つものかも知れない。しかし、同感が、人間の本性であるの

に引き比べ、交換性向は、歴史的な条件である。それは、市場に対して所与とされているのであって、その限りにおいて、市場メカニズムの研究課題とならないものなのである。

だから、交換性向に立ち入らなくとも、市場は説ける。だが、同感に立ち入らなければ、(スミスの場合) 道徳は説けない。どちらも議論の前提であるとしても、性格も役割も異なるのである。

したがって、ヤングのように、『国富論』が吟味することなく交換性向を前提していることを根拠に、『国富論』が同じ意味で同感や観察者をも前提しているとは言えないことになる。

## 2

上述の問題にはまた立ち戻ることにして、ヤングの述べるところに耳を傾けよう。ヤングによれば、「『国富論』における、博愛は相互に恩恵をもたらす交易の基礎ではない、という著しい強調は、経済活動の領域での人間行動における、同感に基づく相互行為の作用の否定や、他者配慮的な動機<sup>27)</sup>の否定と、同じではない。」

ここで、ヤングが念頭に置いているのは、スミスが『国富論』第1篇第2章で「我々が夕食を期待するのは、肉屋や酒屋やパン屋の博愛によるのではなくて、彼ら自身の利害への彼らの関心によるのである」<sup>28)</sup>と述べた箇所である。ヤングが言うには、「経済学者たちは、歴史的にこのくだりを、スミスが市場は自己利害関心だけに支配されると述べたことを意味するものだ、と受け取ってきた」<sup>29)</sup>が、それは違う。ヤングの見解では、「スミスにとって、人々を互いに結び合う人間本性に固有な道徳的能力のゆえに、市場の過程は存在できる。市場の過程は、あるレベルでは自己利害関心の追求に支配されるものとして現われ、より深いレベルでは人間本性の他者配慮的な局面<sup>30)</sup>に現われるのだ。」

『国富論』の叙述に出てこないだけで、『国富論』の論理の奥底には、法学や道德哲学の論理が息付いているはずだ、というわけである。それはそれとして、理解できる。しかし、それは具体的にはどういうことなのか。ここから先がヤング説の面白いところになる。

ヤングは、『国富論』第1篇第6章にある、資本の蓄積と土地の占有に先立つ、初期未開社会での、ビーバー2匹と鹿1頭との交換の例に即して、次のように問う。「なぜ、鹿のハンター——たぶん、ビーバーのハンターより強くて、素早い男——は自分の身体的有利を使って、鹿といかなる交換もなしに、弱い男からビーバーをもぎ取らないのか？ 手短かに言えば、なぜこの状態の下では、略奪や奴隷化ではなくて、自発的な交換が生ずるのか？<sup>31)</sup>」

ヤング説では、ここで観察者が登場してくる。ヤングによれば、「スミスは、是認されたいという欲望が、支配したいという欲望が抑制されるような仕方で、各人の自己への配慮を和らげるだろうことを信じた<sup>32)</sup>」というのだ。これが、ヤングの言う「第1の仮説」である。

これだけでは、ヤング説の特徴はつかみにくいだろう。興味深いのは「第2の仮説」の方である。「第2の仮説であるが、それは、友人や家族の間で生ずる交易と、他人、そして（あるいは）、異族の間で生ずる交易との、重要な区別である。未開な状態でのビーバーと鹿との物語は、ハンターたちが互いに見知っており、同じ社会のグループの一部であることを、暗黙のうちに前提している。<sup>33)</sup>」

ヤングは、抽象的で不可視のものを、可視的な形で示そうと、やや無理な具体化を行なっているので、その点は大目に見なければならないだろう。だが、そうだとしても、ここには重大な難点が懐胎されているのである。もし、交易の当事者たちが、友人などの利益をともにする人々に限られるのであるなら、それはそもそも、市場経済とは根本的に異なる。むしろ、市場経済は、利益をともにしない、他人と他人との交易になじむものであ

るはずである。ヤング説では、観察者が役割を果たす場を確保するために、肝心の市場の性格が、本来の姿から乖離してしまうのである。(八幡清文氏が、同様の指摘を、いち早く行なっておられる。八幡清文「書評 Jeffrey T. Young, *Economics as a Moral Science: The Political Economy of Adam Smith*.」『経済学史学会年報』第36号、1998年11月、183頁。)

そこで(であろう)、ヤングは、「博愛的モデル (benevolent model)」と「悪意のモデル (malevolent model)」とに分けて考えることを提唱する。

ヤングの説明によれば、友愛の結束が弱い存在しないときに、「悪意のモデル」が現実化する。それは、「説得ということがまれな、政治過程の産物なのであって、スミスが“自然な”進化とみなした政治過程の産物ではない。奴隷制、植民地主義、独占、重商主義政策のもとでの国際貿易、<sup>34)</sup> についてのスミスの見解は、すべてこのモデルの実例である。」

他方、ヤングの述べるところでは、「文明化された諸国民の富は、人と人との間の、相互利益的な、分業と交換の網の目に、よそ者を包括するよう、彼らの“博愛的”モデルを拡張する能力のゆえに、広い範囲に現われる。こうした達成の重要な構成要素は、所有を保護し、自然的正義に根ざす法による契約を保護する、文明化された社会の能力である。[……] 社会の現実の法が、自然的正義の原理を正確に具体化すればするほど、分業と交換の利益は増大することになる。<sup>35)</sup>

しかしながら、ヤングの説明では、「博愛的なモデル」に至る道と、「悪意あるモデル」に至る道と、両者の分かれ道は必ずしも明確ではない。それは、正義の法(言うまでもなく、その根底には、同感があり、観察者が存在する)と関連付けられるだけで足りるのかどうか。政策や政治の役割まで含めて考えているのなら、問題は、経済学の抽象性をも越え出てしまうことになる。

### 第3節 交換の正義と分配の正義

#### 1

『国富論』のような論理次元でも、公平な観察者が重要な役割を果たすのだ、というヤングの説が延長されると、『国富論』で説かれる経済諸法則も、観察者の役割との関連で把握されることになる。たとえば、通常、利潤をめぐる競争の結果成立すると考えられている自然価格も、観察者の機能の助けによって成立するものとされるのである。ヤングが言うには、「自然価格は、それがどんな成員にも損害を及ぼさないという意味において、個人や観察者が公正（fair）だとみなすであろうところの、ひとつの合意価格なのだ。<sup>36</sup>」

自然価格は確かに、事実上マルクスの生産価格と同じものだから、費用価格と平均利潤とをちょうどまかなう、つまり、生産者に損害を及ぼさない（絶対的にも相対的にも）価格である。しかし、その価格は、市場参加者が、他者の利益をかえりみることなく、自らの利益のみを追求する、弱肉強食の競争の結果として成立するものである。（より正確に言うなら、成立の傾向にあるだけであって、特定の時点を取るなら、市場価格はほとんど常に自然価格から乖離している。）

だから、自然価格には、市場参加者から見て「公正」な価格、という意味は含まれていないはずである。ところが、ヤングは、重ねてこう言うのである。「スミスは、彼が正義と道徳性を一般的に根拠付けたのと同じやり方で、交換価値を、観察者に是認される社会的な合意として、根拠付けた。そういうものとして、自然価格は、一般的規則に似ている。この合意は、人々の同感の能力を刺激する、“値切りや駆け引き”を通じて達成される。<sup>37</sup>」

どうやらヤングは、「値切りや駆け引き」を、観察し観察される経験の

連鎖と、等し並みに見ているようである。そして、それが詐欺やぺてんではない限りにおいて、「公正」な価格を生み出すのだとしているらしい。だが、「値切りや駆け引き」は、文字通りの詐欺やぺてんではないにせよ、相手を出し抜こうとする点で、詐欺やぺてんに近いものでありうる。それが犯罪となるかどうかは、自然法ではなく、実定法の規定によるしかないのである。

もともと自然価格は、「公正」を目指していないし、結果も「公正」と受け止められるとは限らない。それまで必需品とみなされていた商品の自然価格が、生産条件の変動によって著しく上昇し、大衆に手が届かないものになったとしたら、観察者は直ちにその価格を「公正」だと判定しうるであろうか。社会の成員にそのような機能が欠けているからこそ、市場での決定が必要になるはずである。

しかし、ヤングは自説をさらに敷衍して、収入の諸形態の水準決定にも、観察者の機能が関与するとしているのである。まず一般的に、ヤングはこう言う。「観察者のメカニズムは、発展した状態においても、認められることになる。たとえば、自然価格の構成部分としての収入の非労働的形態を形成することに、また、支払い（pay）〔賃銀とその類似形態〕や利潤の格差を形成することに、その影響が認められるのだ。<sup>38)</sup>」

そして、スミスが『国富論』第1篇第10章で述べている賃銀等の格差論（不快な仕事、訓練を要する仕事、雇用が不規則な仕事、社会的信頼を要する仕事、などは賃銀等が通常より高くなる）を念頭に置いて、次のように述べる。「熟練労働はより生産的でより希少だ、という単純な話ではない。それ〔支払いの格差〕は、この熟練の格差のゆえに正しく妥当であるという、共同体の合意があるのだ。それは、“勤勉、慎慮、用心”といった徳への報償という問題でもある。物的な富がこれらの徳への“最も妥当な”報償なのだ。／近代の傾向に沿って、支払いの格差は、高い生産性と、熟練費用の非効用への補償との、結合から生ずるのだ、という議論が可能

かも知れない。しかし、法律家や医者への支払いの格差を取り扱った際に、スミスが主張したのは、“それゆえ、彼らの報償は、そのような重大な信頼が必要とする社会的地位を、彼らに与えうるものでなければならない”<sup>39)</sup>ということであった。」

しかし、スミスの賃銀論によれば、「労働の貨幣価格は二つの事情によって、すなわち労働に対する需要と、生活の必需品および便益品の価格と、両者によって必然的に規制される」<sup>40)</sup>のが基本である。つまり、賃銀は市場メカニズムによって決定されるのが基本なのである。ヤングが、スミスの記述を念頭に、観察者の機能が賃銀の決定に作用すると述べている事態は、一種の例外規定に過ぎない。とりわけ、法律家や医者への支払いの議論では、スミス自身も、本筋から逸脱するきらいがあると言ってよい。したがって、ヤングのここでの立論には無理がある。

地代や利潤についても、ヤングは、その水準決定が観察者の論理にかなうものであるとの議論を展開しているが、もはやそれらに立ち入る必要はないだろう。

市場メカニズムの背後に、市場メカニズムを一面で下支えしている、道徳や法があること自体には、何の問題もない。ただ、ヤングのように、観察者を具体的に市場で機能するものとして導入することには、問題が多いのである。なぜなら、市場が独自の原理によって運動するとき（そうでなければ、経済学は成り立たない）、観察者が市場に登場しても、彼は市場の原理を変更できないからである。

ヤングが、「自然価格は、一種の正当（just）価格として、また、社会の資源配分を指示する、経済学的な効率的価格として、規範的な重要性を持つのだ」<sup>41)</sup>と言うとき、その自然価格の水準を決定しているのは、正当性の根拠である観察者なのか、それとも、効率性の根拠である市場原理なのか。二つの根拠が同じ価格を成立させているのならば（そうとしか考えようがない）、観察者は一体何をしていたのか。観察者は、市場の運動を、文字

通りに「観察」していただければならざるをえない。それならひるがえって、観察者を具体的に市場で機能するものとして導入する必要はなかったのである。

## 2

ともあれ、ヤングは、これまでの議論を総括する形で、次のように述べている。

「自然価格は、正当価格であるばかりではなく、均衡点でもあり、均衡点において安定する。市場価格は、市場の諸機能が一定の自然法に従うために、自然価格に不断に引き付けられる。正義は、制度的な前提条件であり、こうした過程の結果でもある。こうして、正当価格は、値切りや駆け引きの過程の均衡として発見される。市場の過程の帰結は、スコラ派やプロテスタントが、正当な賃銀や価格をもたらすに必要であろうと述べた諸要素を、正確に考慮に入れた、賃銀と価格の構造である。実に、市場だけがこれをなしうるのだ。〔……〕／上述の事柄を、作用因と目的因という観点から、別の見方でながめてみよう。スコラ派にとって、目的因として現われる正義のために、市場における人間の動機付けの基礎としての、正義の規則への厳格な忠誠が、作用因として要求される。結果する正義のために、正義は、行為への動機、あるいは、少なくとも行為への意図でなければならない。これはスミスとは異なる。結果としての正義、ないしは目的因は、個人の行為の、意図ないしは目的である必要はない。それは、制度的な背景の一部である必要があるが、その必要が満たされるならば、自己利害関心が作用因となり、正義が目的因となる。その帰結は、正当価格であり、また、社会福祉が、誰の権利も侵害することなく、高められることである。スミスもやはり、人々が正義という徳性を追求することを期待しているが、彼にとってこのことは、人々のあらゆる状態の特性が所与だ



として、人々にどんな価格が正当か知っていることを要求しない。スミスの正義が、個人的な徳性として、いかなる積極的な義務をも要求せず、他者の個人的な権利、所有、占有において他者に危害を及ぼさないとう、消極的な義務だけを要求するものであることを、想起されたい。市場が正当な価格を確立するのであって、個人はただ、その状態にとって市場の標準が何であるかを、発見しさえすればよいのだ。もし制度が“正しい”ならば、スミスの正義は、帰結が正義になるよう、適正に機能するために、市場にとって十分なのである。<sup>42)</sup>」

ヤング自身の理解においても、観察者が果たすべき役割は、不明確と言わざるをえないことがわかるであろう。だが、ここで注意しておきたいのは、市場が自然価格や一定の賃銀水準等を形成することが、ヤングの場合、正義の実現と一体にされてしまうことである。「スミスの場合にはそうなのだ」ということなのだろうが、たとえそうだとした場合、ヤングのように正義の意味を限定してしまうと、スミスの思想をせまくとらえ過ぎる恐れがある。実際、ヤングの次の発言はそのような難点を含むものであろう。

「自然的自由の根本原理は、スミスが“正義の法”と呼ぶものである。実際、経済学の体系、それをスミスは“自然的自由”と呼ぶのだが、それは、正義と事実上同義なのである。資本の自由な移動を妨げる法を批判してスミスは、そうした“法は自然的自由の明らかな侵害であり、『それゆえ不正義である』”と述べている。<sup>43)</sup>」

ここでは、正義は、重商主義と対立するものとしてしか描かれていないと言ってよい。そして、そのように解するならば、交換の正義とともに、分配の正義もまた、市場の「自由」まかせとならざるをえないであろう。事実、ヤングはこう言う。

「我々が述べようとするのは次のこと、すなわち、スミスの一般的な立場は、政府が目指すべきは、“最適な不平等度”と呼ぶべきものを社会に確立することであり、重商主義の体系の下で現われる不平等度は、最適よ

りもずっと不平等である、ということである。だから、重商主義の体系から自然的自由への移行は、実在の法を正義の法への適合に近づけるだけではなくて、分配の正義をも促進する。<sup>44)</sup>」

これもスミスの的には、第一義的にそうなのかも知れないが、スミスの思想は、スミスが生きた時代状況を越える普遍性を持っているはずである(だから学ぶ価値がある)。そうであるとすれば、スミスの思想を、重商主義批判の側面でのみ把握するのは、せま過ぎるのである。無論、ヤングもこのことは意識しているのだろう。ヤングは、以下のように、正義の概念を一般化する。

「第1に、アリストテレス的——スコラ派的な分配の正義の概念(共同社会的な義務としての分配の正義)と、プロテスタント的な分配の正義の概念(慈善としての分配の正義)とは、首尾一貫した方法で共存される。君主は、共同体の是認を伴いながら、受益者への共同体的義務に基礎を置く、個人の博愛行為を、要求する法を確立するだろう。第2に、分配の正義は博愛の一部なのだから、博愛を経済学の規範からはずしてしまうことは、誤解である。スミスは博愛に、公的な次元を与えている。このことはひるがえって、スミスの分配の正義の概念に、公的な領域を持ち込むことになる。<sup>45)</sup>」

そして、ヤングは、次のようにも言う。「分配の正義はだから、私的であると同時に、公的な責任でもあるのだ。公共を代表する立法者は、“恐るべき無法”と個人の自由とのアリストテレス的な中庸を見出すほどに、またそれゆえ、交換の正義の境界を必要以上に踏み越えないほどに、賢明であるに違いない。したがって、分配への関心が、交換の正義と衝突したり、交換の正義をくつがえしたり、という場合はわずかでしかないだろう。交換の正義は、依然として、社会生活を可能にする重要な基礎であり、しかし、その交換の正義がそれ自体、分配の正義への関心の不足を意味すると、受け取られる必要は『ない』<sup>46)</sup>のである。」

つまるところ、ヤングは、分配の正義の実現を、政治の役割に一部ゆだねてしまっているのである。どうもヤングは、政治を法の次元で理解しているようなふしがあるが、それは間違いのもとになる可能性が高い。政治は、経済の上部構造なのであって、だからそれは、自然法の正義に対して、上部の上部の問題であることになる。それゆえまた、スミスの枠組みの内部で、分配の正義を取り扱うこと自体に無理がある。

もともと、スミス流の同感法学では、民事上の利害の対立がうまく処理できないという問題がある。<sup>47)</sup>したがってまた、分配の正義のように、利害の対立する問題は、観察者原理だけでは解明できないのである。

だから、ヤングの次の主張も、やや空しく響くことにならざるをえない。「自己利害関心はたぶん非常に強い感情であるが、それは博愛を排除しないし、社会的責任（個人の力はこの社会的責任の範囲内で結果に影響する）から個人を解放しない。それは依然として、これら人間本性の他者配慮的な側面に、直接にスミスが公共精神と呼ぶものに、有徳の立法者の性格に、<sup>48)</sup>関連するのだ。」

## おわりに

「老アダム・スミス問題は、老兵のように死にしなければ、消え去りもしない。」<sup>49)</sup>これは、ヤングの書物の最後に近い箇所にある言葉である。確かに、アダム・スミス問題は、本来のスミス解釈上の問題としても、決着の付き難い問題である。

そして、スミス解釈を離れて、経済学と倫理学との関係の如何、あるいは市場とモラルとの関係の如何、というように拡張するなら、より一層決着の付き難い問題となることは明らかであろう。しかし、それがまた、考えるに値する重要な問題であることも、また明らかなことであるように思われる。

冒頭でも触れたように、経済の問題と道德の問題とは、最初から無縁ではない。両者は、むしろその起源から密接な関連にあると見てよい。スミス以降の経済学の展開は、言うまでもなく、道德の問題を、経済の問題から、切り離す道をたどってきた。だが、それでいいのかという問題意識は、わずかずつ高まりつつあるようにも見受けられる。アダム・スミス問題に関する著作に限らず、市場とモラルとの関連についての著作が、近年欧米で相次いで公刊されているのも、そうした問題意識の高まりによる面もあるのではないかと推察されるのである。

ヤングの書物は、次の言葉で締め括られている。「科学的経済学は、道德的な基礎を有する。アダム・スミスは、そして現代の科学的経済学者の“アダム”と“スミス”は、それを知っている。<sup>50)</sup>」

この言葉に付け加えて、次のように言っておきたい。それを知っている知り方が問題なのだ。

註

- 1) 江戸時代の経済思想家については、差し当たり、以下を参照。折原裕「江戸期における商利肯定論の形成——石田梅岩と山片蟠桃——」、『敬愛大学・研究論集』第42号、1992年9月、同「江戸期における重商主義論の成立——海保青陵と本多利明——」、『敬愛大学・研究論集』第43号、1993年3月、同「江戸期における重商主義論の展開——佐藤信淵と横井小楠——」、『敬愛大学・研究論集』第44号、1993年9月、同「江戸期における農兵論の系譜——熊沢蕃山と荻生徂徠——」、『敬愛大学・研究論集』第47号、1995年3月、同「江戸期における農兵論の展開——太宰春台と林子平——」、『敬愛大学・研究論集』第48号、1995年9月、同「江戸期における反搾取論の展開——安藤昌益と三浦梅園——」、『敬愛大学・研究論集』第50号、1996年6月。
- 2) Athol Fitzgibbons, *Adam Smith's System of Liberty, Wealth and Virtue; The Moral and Political Foundation of The Wealth of Nations* (Oxford University Press, 1995). フィッツギボンズのこの著作については、折原裕「よみがえるアダム・スミス問題——フィッツギボンズ説の検討——」、『敬愛大学・研究論集』第56号、1999年9月、を参照。
- 3) Jeffrey T. Young, *Economics as a Moral Science; The Political Economy of Adam Smith* (Edward Elgar, 1996).
- 4) *Ibid.*, p.19.
- 5) *Ibid.*, p.9.
- 6) *Ibid.*, p.10.
- 7) *Ibid.*, p.5.
- 8) *Ibid.*, p.6.
- 9) *Ibid.*, p.23.
- 10) *Ibid.*
- 11) *Ibid.*, p.31.
- 12) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Vol.I (London, Oxford University Press, 1976) p.9. 水田洋訳『道徳感情論』（筑摩書房、1973年）5頁。
- 13) Young, *op. cit.*, p.31.
- 14) *Ibid.*, p.32.
- 15) *Ibid.*, p.33.
- 16) *Ibid.*, p.32.
- 17) *Ibid.*, p.33.
- 18) *Ibid.*, p.34.
- 19) *Ibid.*, p.43.
- 20) *Ibid.*, p.46.

- 21) *Ibid.*, p.47.
- 22) *Ibid.*, p.50.
- 23) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, p.63. 水田洋訳『道德感情論』96頁。
- 24) Young, *op. cit.*, p.47.
- 25) *Ibid.*, p.55.
- 26) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Vol.II-1 (London, Oxford University Press, 1976) p.25. 大河内一男監訳『国富論 (I)』(中公文庫、1978年) 24頁。
- 27) Young, *op. cit.*, p.55.
- 28) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, p.26-27. 大河内一男監訳『国富論 (I)』26頁。
- 29) Young, *op. cit.*, p.61.
- 30) *Ibid.*, p.64.
- 31) *Ibid.*, p.57.
- 32) *Ibid.*, p.58.
- 33) *Ibid.*
- 34) *Ibid.*, p.64.
- 35) *Ibid.*, p.64-65.
- 36) *Ibid.*, p.67.
- 37) *Ibid.*, p.68.
- 38) *Ibid.*, p.72-73.
- 39) *Ibid.*, p.75.
- 40) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, p.103. 大河内一男監訳『国富論 (I)』145頁。
- 41) Young, *op. cit.*, p.77.
- 42) *Ibid.*, p.122.
- 43) *Ibid.*, p.125.
- 44) *Ibid.*, p.129.
- 45) *Ibid.*, p.133.
- 46) *Ibid.*, p.134.
- 47) この点に関しては、田中正司氏の著作『アダム・スミスの自然法学——スコットランド啓蒙と経済学の生誕——』（御茶の水書房、1988年）の第2部第5章「同感法学の破綻」を参照。
- 48) Young, *op. cit.*, p.188.
- 49) *Ibid.*, p.203.
- 50) *Ibid.*, p.207.